シンガポールの国防政策

佐藤　考一

Singapore's Defence Policy

Koichi Sato

Obirin University, *Obirin Review of International Studies*, No. 14, 2002
桜美林大学『国際学レヴュー』第14号（2002年）

Summary

Singapore is said to be a small "Chinese Island" in the "Hostile Malay Sea", because of her unfortunate history: the confrontation against Indonesia 1963–1967 and the separation form Malaysia in 1965.

Therefore Singapore Statesmen often liken its unique defence policy against Indonesia and Malaysia, to the defence functions of small animals. Because small animals have no offensive against big carnivorous animals, but they are well-prepared for self-defence.

Mr. Lee Kuan Yew, former Prime Minister likened Singapore's defence policy to the defence function of poison shrimp in 1966. Professor Lau Teik Soon, former Member of Parliament, likened it to the defence function of pelanduk (mouse deer) in 1990. And the Prime Minister Goh Chok Tong compared it to the defence function of porcupine in 1986 (then he was the defence minister).

This article is to analyze the contents of Singapore's "Total Defence" concept; *consists of psychological defence, social defence, economic defence, civil defence and military defence*, and the history and military equipments of Singapore Armed Force (SAF), for the assessment of these similes as above.

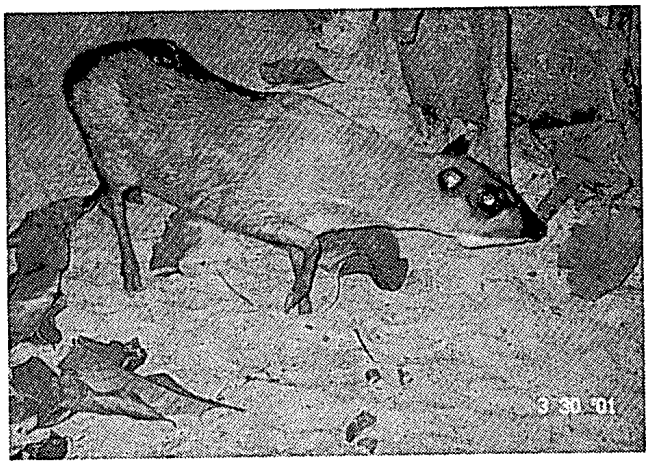
* * *

1. 問題の所在

マレーの多島海に浮かぶ淡路島程の小島の都市国家、シンガポールの国防政策は、同国の政治家たちによって、しばしば小動物の防衛機能に譬えられてきた。本稿を始めるにあたり、それらの実例を紹介してみよう。

まず、1966年6月15日に、当時のリー・クアンユー首相は、シンガポール大学での講演で、「大魚は小魚を追っかけ、小魚は小エビを追っかけてきた…いまや欧州の大魚は追い出されつつあり、地元の大魚が小魚を、小魚が小エビを従える環境が整ってきた…小エビにもいろいろな種類があり、生き延びるものもいる…種族の保存のために自然の防衛メカニズムを発達させるものなのだ…ある種のエビは毒をもっていて刺す…食べると消化不良を起こす」と述べ、シンガポールは毒エビのように自分の生き残りのテクニックを見付けなくてはならないと説いている。[1)]

次に、与党人民行動党の国会議員で、外交・安全保障問題の専門家であったラウ・テクスン博士は、1990年12月16日に、「シンガポールの安全保障政策は、海の動物に譬えれば毒エビのように、陸の動物に譬えればマメジカ（写真）のように振る舞うということだ…エビはどれも外見は極めて美しい…マメジカも小型で美しく、誰もが狩りたがる動物だ…だが、毒を持つエビは（魚に嫌われるから）生き残れる…マメジカも、すばしこく逃げる能力があるから敵に捕まらない」と述べ、シンガポールは安全保障政策上、これらの動物のように振る舞う努力をしてきたと、その歴史を回顧している。[2)]



写真：マメジカ
小型犬程の大きさで角はなく、雄は犬歯が発達している。シンガポール動物園にて筆者撮影

最後に、1991年にシンガポールの第2代首相となったゴー・チョクトン氏は、国防相だった86年に「我々は防衛の準備が整うより先に、脅威が出現するのを待っているべきではない…種々の脅威を認識できるようになった時は手遅れだと思う…我々の目的は、動物の世界のある種の動物たちのように振る舞うことだ…どうしてヤマアラシは背中に沢山の針を背負っているのだろうか…それらは1つの防衛メカニズムである…我々は我々の背中に針を持ちたいのだ」と述べて、自国の防衛の理想をヤマアラシに譬えた。[3)]

さて、ここでは、毒エビ、マメジカ、ヤマアラシの3種の小動物の名が挙げられているが、実際のところ、シンガポールの国防政策は、どれに一番近いのだろうか。本稿の目的は、この点を明らかにすることである。

以下、1965年にマレーシアから分離して、独立国となったシンガポールの国防政策を、心理防衛、社会防衛、経済防衛、市民防衛、軍事防衛の5つからなる、そのユニークな総合防衛（Total Defence）の概念[4)]と、ミドル・パワーと見なせる[5)]と言われるまでになった、軍事防衛の当事者であるシンガポール国防軍（SAF）の歴史と装備、対外軍事協力の変化と発展から検討し、この問題の答えを探ることにしたい。

2. 総合防衛

（1）総合防衛の概要

総合防衛は、1984年に当時のゴー・チョクトン（Goh Chok Tong）第1副首相兼国防相の下で、国防政策の指針として示された概念であるが、シンガポール国防省から2000年1月に刊行された、*Defending Singapore in the 21st Century* では、その内容は次のように説明されている。[6)]

> 複雑な安全保障環境の下では――シンガポールの防衛に決定的に重要なものではあるが――シンガポール国防軍だけでは、不十分である。シンガポールの生存を確かにするものは、全市民が役割を果たす、総合的な抑止努力である。
>
> 総合防衛の概念は、我々の国益[7)]を防衛するための継ぎ目のない、統合された総合的な能力を達成することを目的としている。5つの要素――心理防衛、社会防衛、経済防衛、市民防衛、軍事防衛――からなる総合防衛は、社会のあらゆる分野を、シンガポールの防衛に結び付け、関与させる。
>
> 長年、総合防衛の強化のための段階が踏まれてきた。公共非常事態演

習、市民防衛ボランティアの訓練が行われ、市民防衛のための草の根諸組織の設立がなされた。より最近の発案は、国民教育プログラムである。1996年9月に始まった国民教育プログラムは、シンガポール国民の我が国への関与の強化——例えば、国民の「心情」と社会の結合のように、シンガポール国民がマルチ・カルチュラルでマルチ・エスニックな国家の多様性の中での団結を強化することを目的としている。

（2）総合防衛の5要素

では、この総合防衛の5つの要素の内容はどのようなものか。5つの要素について、シンガポール国防省から1990年11月に刊行された、Defence of Singapore 1990 は次のように、その内容を説明している。[8)]

心理防衛：国民の間に、国民のものであるシンガポールを守る集団的意志を発展させることをいう。そのために、以下の5項目の国民教育メッセージが作成されている。国民皆兵であることを考えれば、これはシンガポール版の軍人勅諭であるともいえる。

1. シンガポールは我々の母国（Homeland）である。ここは我々が所属する所である。
2. シンガポールは守るに値する。我々は、我々の伝統と我々の生活様式を継承することを望む。
3. シンガポールは守ることができる。団結し決意を固め、準備を万端整えて、我々の家庭と家族や子供たちの将来の安全のために戦うべきである。
4. 我々自身で、シンガポールを防衛しなければならない。我々の他に、我々の安全に責任を負うものはいない。
5. 我々は他国が我々を攻撃することを抑止することができる。総合防衛をもってすれば、我々は平和に暮らすことができる。

社会防衛：マルチ・エスニック[9)]で、多言語、多宗教の状況を乗り越え、社会的結合力を強化することをいう。互いの調和と尊敬と寛容の維持のための合議による努力が必要である。

経済防衛：政府、実業、工業を組織し、経済と生産手段が戦争で破壊されず、破壊活動や戦争の脅威によってもそこなわれないことをいう。非常時に、予備役が招集されても事務所と工場が業務を行えることが要求される。

市民防衛：市民非常事態や戦争の際にも、市民が人命と財産を守ることができる能力を持つことをいう。市民たちは、救急、避難、消防、破壊統制の

ための訓練を受け、献血、水と食糧の配給の要領をつかんでおくことが必要とされる。道路の一部は、空軍機のための緊急用の滑走路として使用でき、民間の自動車（トラック等）、船舶、航空機も軍用に徴用することが可能で、さらに全ての新しい（高層）住宅団地には防空壕が付設されている。[10]

軍事防衛：予備役・徴兵（2年）・正規兵に、シンガポールの主権への脅威に対して、信頼できる軍事抑止力を供給させ、万一、抑止に失敗した場合でも、効果的な対応ができる能力を持つことをいう。予備役の緊急動員は、報道機関等を用いた公開動員の場合、6時間以内に、伝令等を用いた秘密動員の場合は24時間以内に、戦闘状態に入ることを可能としている上、軍事戦略として、前方防衛（Forward Defence）が重視されており、国内で戦うことは想定されていないと考えられる。[11] 軍事防衛の歴史と装備については、第3節で詳述するのでここでは触れない。

（3）総合防衛の形成要因

では、このような5つの要素を持つ総合防衛概念は、なぜ形成されたのか。国防あるいは安全保障の概念の策定に大きな影響を与えるのは、（a）当該国家が所属する地域全体を構成する国民国家群の性格（国民統合の度合いと産業構造のあり方）、（b）脅威対象の数、（c）脅威対象国の軍事次元の装置の性格、（d）地域全体の地形とも関連する地域紛争の性格、の4つの要素から構成される、その国をめぐる安全保障環境の性格とでもいうべきものである。[12]

（a）については、総合防衛の概要の項で述べたように、シンガポールは、華人、マレー人、インド人からなる、マルチ・エスニックな国民と国家の一致度の低い国である。[13] 心理防衛や社会防衛に力を入れざるを得ないのはこのためである。だが、同時に、シンガポールは高度に工業化された、破壊に弱い都市国家でもある。[14] 戦時にも生産性を落とさない経済防衛に力を入れているのはこのためである。

（b）については、1963～67年のインドネシアとの軍事対決や、1965年のマレーシアからの分離独立の経緯から見て、（同国政府が公式に認めたことはないものの）潜在的な脅威対象はインドネシア・マレーシアであるが、同時にシンガポール国内には、両国に血縁者を持つマレー人が少なからぬマイノリティとして居住しており、さらに生鮮食料品と飲料水の大部分を両国、特にマレーシアに依存しているという、特殊な事情がある。[15] これも、心理防衛、社会防衛、経済防衛に力を入れる理由となっている。

（c）については、表1に示したように、インドネシア・マレーシアの軍事

表 1　ASEAN 諸国の軍事力（1999年）

国名	人口（百万人）	GDP/人 (98)	総兵力	主力戦車 (L)軽戦車	主要水上戦闘艦	戦闘機
ブルネイ	0.3	$7,300	5,000	16(L)	—	—
カンボジア	10	$ 700	149,000	100 10(L)	—	24
インドネシア	200	$4,400	298,000	365(L)	17	140
ラオス	5	$2,700	21,900	30 25(L)	—	26
マレーシア	22	$11,200	105,000	26(L)	4	87
ミャンマー	50	$1,100	429,000	100 105(L)	—	83
フィリピン	75	$3,200	110,000	65(L)	1	44
シンガポール	3	$25,900	73,000	60 350(L)	—	174
タイ	63	$8,200	306,000	289 510(L)	15	229
ベトナム	80	$1,200	484,000	1,315 620(L)	6	189
日本	120	$23,700	236,300	1,040	55	420

出　典：*The Military Balance 1999–2000*, International Institute for Strategic Studies, 2000.
備　考：本統計の戦闘機数には、海軍機を含む。

次元の装置は兵員数こそ多いが、小火器を中心とした治安軍組織である。重武装の国防軍組織を持って、前方防衛のように国外で戦うことを想定すれば、対抗することは可能である。この面で、軍事防衛が重視されるのは当然である。

（d）については、冒頭に述べたようにシンガポールは、島国の都市国家で、戦略的深度がない、破壊に弱い構造であるし、潜在的な脅威対象のインドネシア・マレーシアとは指呼の間にあるという、不利な条件の下にある。[16] 戦時の国内での破壊に備える市民防衛と、（c）で挙げたように、前方防衛を戦略とする軍事防衛の組み合わせが重視されることはこれによってもわかる。

3. シンガポール国防軍：その歴史と装備、対外軍事協力

（1）シンガポール国防軍の歴史：イスラエルへの軍事訓練依頼

1965年 8 月 9 日の独立当時、シンガポール国防軍（Singapore Armed

Force:SAF）の装備は、2個大隊の歩兵部隊（将校50人、兵士1000人）と2000丁のライフル銃がその全てであった（まだ国防省は設立されておらず、国防軍は1970年に国防省ができるまで、警察と共に内務防衛省の管轄下にあった）。[17]

SAFは、1967年に徴兵制を採用し、イスラエルに軍事訓練を依頼したが、周囲を脅威対象国に囲まれている地域安全保障環境が似ているからといって、初めから同国に軍事訓練を依頼したわけではない。[18]イスラエルは、当時から周辺のアラブ諸国と敵対していた。そのアラブ諸国と同じムスリム（イスラム教徒）が主導するインドネシアやマレーシアが、シンガポールとイスラエルの軍事面での提携を快く思うはずはなく、かつ、そういう挑発的なことを敢えてやるだけの余裕は、シンガポールにはなかったのである。

当時外相だったラジャラトナム氏は、この点について、「最初はインドに（軍事訓練の指導を）頼んだが、インドは、我々がマレーシアと対立しているのを知って手を出すのをやめた…マレーシアの方が経済的に有利だったからだ…次に、我々はナセル（当時のエジプトの大統領）に依頼したが、エジプトはマレーシアと同じ“イスラム国家”なので断ってきた…こうした消去の過程でイスラエルが残った」と述べている。[19]

イスラエルへの軍事訓練の依頼は、当時のシンガポール政府としては苦渋の選択だったのである。だが、イスラエルの軍事顧問による訓練指導は、1967年から74年までの短期間であったにも拘らず、その先制防衛（Pre-emptive Defence）戦略が既述のシンガポールの前方防衛戦略となったり、同国軍が使用した中古のフランス製軽戦車AMX-13（69年）や、イスラエル製のガブリエル・ミサイル（98年）を、SAFが採用する等、様々の形で、その後のシンガポールの国防政策に影響を与えることとなった。[20]

（2）装備の変化

では、SAFの装備は、独立後30年の間にどのように変化したのか。時系列的にこれを見れば、シンガポールの国防政策の重点が何であるかは明らかになるであろう。ここでは、1968年以降の10年毎の装備の量的変化（表2参照）と、技術的に新しい装備を取り入れた際の質的変化（表3参照）を追っていくことにする。

まず、表2に示したように、徴兵制を敷いた1967年当時、総兵力は2000名の歩兵のみで、海軍・空軍はなく、駐留英軍の海空軍力に頼っていたことがわかる。国防費はGDPの2％程であった。それが、31年後の98年には、3軍構成の総兵力は、67年の36.3倍の7万2500名に、国防費はGDPの4.5％、

表2　シンガポール国防軍の装備の量的変化

年	1967	1977	1987	1998
GDP(US$m)	1,248	6,500	20,200	96,000
国防費(US$m)	25.8	340	1,110	4,300
総兵員	2,000	36,000	55,500	72,500
軽戦車	—	75	300	350
主力戦車	—	—	—	60
戦闘機(空軍)	—	96	180	157
主要水上戦闘艦	—	—	—	—
潜水艦	—	—	—	1

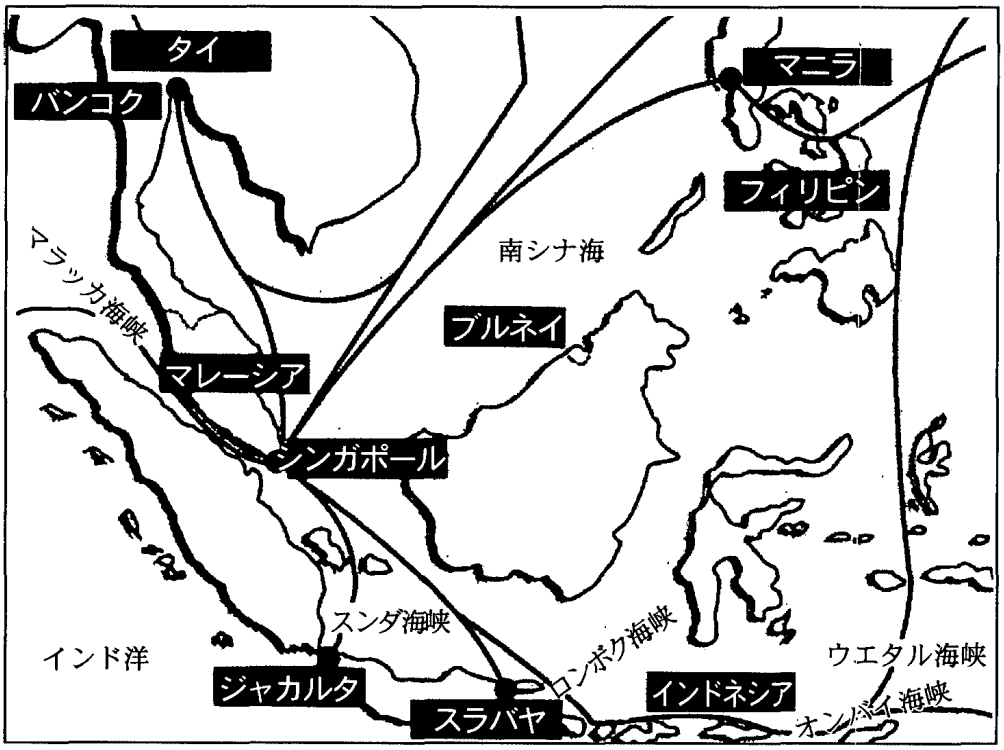
出典：*Military Balance*(各年版), International Institute for Strategic Studies.
備考：1967年のGDPは、US$ 1=S$ 3として概算したもの。

表3　シンガポール国防軍の装備の質的変化

年	内　　容
1969	Hawker Hunter 戦闘機、AMX-13 軽戦車導入
1970	Bloodhound 地対空ミサイル(射程 5km)、パトロール・ボート導入
1971	上陸用舟艇導入、撤退する英軍より Tengah 空軍基地受領
1972	ミサイル艇2隻導入
1974	Brani 海軍基地開設、A4S Skyhawk 戦闘機導入
1976	2隻の掃海艇で海軍将兵が太平洋横断
1977	掃海艇就役
1979	F-5E、F-5F 戦闘機導入
1980	国産沿岸警備艇導入、この年までに C-130 空中給油機導入
1981	Paya Lebar 空軍基地開設、この頃無人偵察機の開発開始
1982	Hawk 改良型ミサイル（射程 40km）導入
1985	Super Puma 攻撃ヘリ導入
1986	ミサイル艇に Harpoon(射程 110km)装備(87年試射)、A-4 Skyhawk に U.S.F-18H のエンジン搭載、Super Skyhawk に改良
1987	E2C Hawkeye 早期警戒機導入
1988	国産 155mm 曲射砲導入、独星提携でミサイル・コルベット艦建造
1990	F-16 戦闘機導入
1995	英国製主力戦車 Centurion60 輌導入
1998	スウェーデン製中古潜水艦購入、同国で訓練開始、イスラエル製 Gabriel ミサイル（射程 20km）試射
1999	イスラエル製 Barak ミサイル（射程 0.5-12km）試射、南アフリカで旧ソ連製 Igra ミサイル（射程 5 km）試射、米軍より中古の KC-135 空中給油機4機受領

出典：*Pioneer* 各号, *Straits Times* (Dec. 11, 1988), *Straits Times*(May 29,1998), Andrew T.H.Tan, Singapore's Defence: Capabilities, Trends, and Implications, *Contemporary Southeast Asia*, Vol. 21, No. 3, 1999, pp.451-474, *Military Balance*（各年版）,『防衛年鑑 '92』防衛年鑑刊行会。

図１　シンガポールから見た東南アジアのシーレーン



参考資料：*Pioneer*（May 1991），p.9.

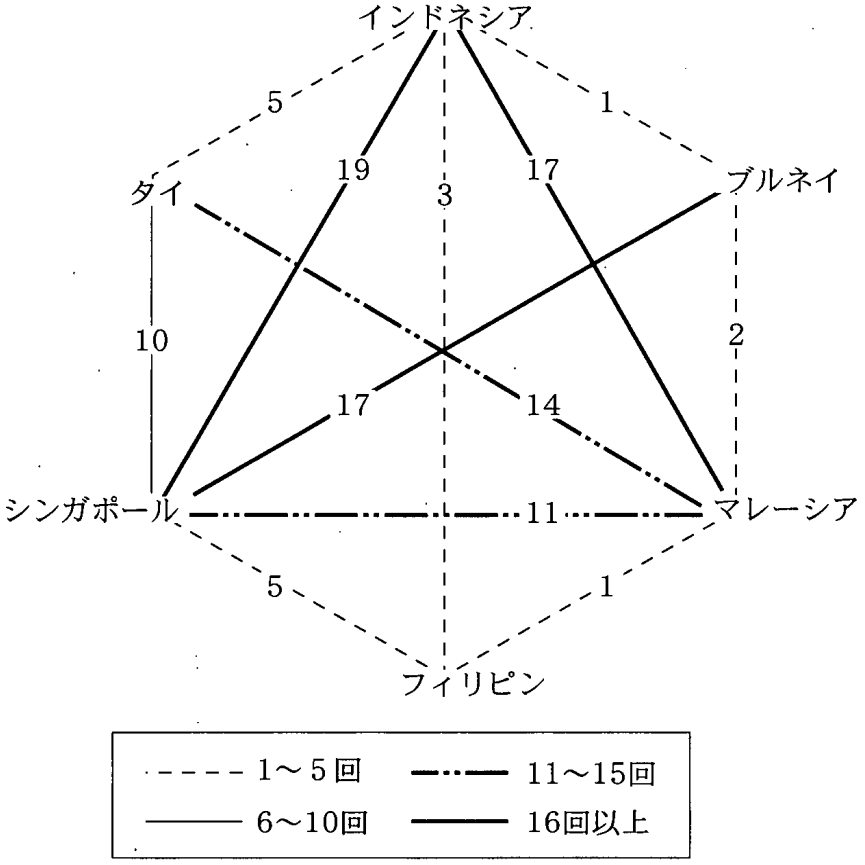
額面では67年の166.7倍に膨れ上がっている。凄まじいばかりの大軍拡である。

だが、ここで特徴といえるのは、陸軍の主力戦車・軽戦車、空軍の戦闘機の数が多いのに比して、海軍で目立っているのは後述する潜水艦だけで、主要水上戦闘艦は１隻もないことである。[21]表１で他国の装備と比較すると、これは一層はっきりする。

ASEAN 域内では、主力戦車の数はベトナム・タイ・ミャンマー・カンボジアに次いで５位（軽戦車の数では４位）、戦闘機の数（海空軍の総数）でも、タイ・ベトナムに次いで３位であるが、海軍については、陸封国のラオスと変わらない。領海が狭いこともあり、海戦を想定した防衛政策は考えられていないことがわかる。また、大きな海軍力を保持しないことは、領土的野心を持って海外へ侵略する意図がないことを示してもいる。

問題は、陸軍の戦車と空軍の戦闘機を主体とする装備の増強であるが、これは、表３に示した装備の質的変化を見るとさらにはっきりする。1969年のホーカーハンター戦闘機と AMX-13軽戦車の導入後、目立っているのは、F-5E（79年）、F-16（90年）等の、その年代の先進的戦闘機と空中給油機（80年、99年）の導入、そして95年の英国製主力戦車センチュリオンの導入であ

図２　ASEAN域内の２国間合同軍事演習
（1987-97年）計105回



注：マレーシアとシンガポールの合同軍事演習には，
英連邦5ヵ国防衛協定の演習は含まない。
出所：『東南アジア月報』，*Pioneer, Straits Times,* 各号
より筆者作成。

出典：佐藤考一「ASEAN諸国の合同軍事演習」
『東亜』2000年10月号，53頁。

る。

さらに他の兵器についていうなら、ハープーン（86年）や前述のガブリエルのようなミサイルの導入と、潜水艦の導入（98年）が目立っている。前節で述べたように、戦略的深度がない（領土・領空・領海が狭い）、破壊に弱い都市国家のシンガポール[22]が、国内で戦車や戦闘機、ミサイルを用いた作戦を行うことは考え難い。やはり、これらの装備は万一の場合は国外で戦う前方防衛戦略のためだと考えられる。

この点について、1989年当時のウィンストン・チュー国防軍司令官は「シ

ンガポール陸軍は、マレーシアの共産勢力が強大になった時にマレーシア政府を助けるためにマレーシアへ進入する」と発言したといわれているし、別のSAF関係者は、SAFがブルネイでジャングル戦（陸軍・空軍）の訓練を行っているのは、「マレーシア、インドネシアから応援の依頼があった時のためだ」と述べているという。[23]

さらに、1989年12月にマラヤ共産党とマレーシア・タイ両国政府が「停戦」して、共産勢力の脅威がなくなってしまった後は、SAFの装備についてシンガポールの国防相は「マレーシア国内のイスラム復興主義者の過激派が強大になった時、マレーシア政府を助けるためにある」と説明しているという。[24]どれも苦しい言い訳に聞こえるが、これらの発言からSAFが自国内で戦うつもりはないことは、はっきりわかる。

さらに、英国の専門家は、「シンガポールは、（万一の戦争の場合に）優勢な空軍力で、マレーシア空軍を戦闘不能にし、圧倒的な機甲力で、ジョホール州の水源を確保するつもりだ」と、より率直に述べている。[25]

1998年に導入が始まった潜水艦についても、同様のことがいえる。潜水艦は、広い海域で探査を行えば、他国の潜水艦の情報を得られる他、誰でも知っている通り、水上艦艇を沈めることができる、攻撃性の強い兵器でもある。だが、シンガポールの狭い領海内では使い道は殆どないであろう。また、ASEAN域内ではインドネシアとベトナムが2隻ずつ保有しているだけの先進兵器で、周辺諸国を刺激しそうな装備でもある。[26]

そんな潜水艦を導入した理由について、シンガポール国立大学のリー・ライト教授（安全保障論）は、「ASEAN諸国は、（南シナ海紛争に関連して）潜水艦戦が起こることを恐れて潜水艦を購入しようとしている…これに関して中国は（ASEAN諸国に比べて）とても進んでいるので、我々は水上だけでなく、水中からもモニターする必要があるのだ…我々は先進兵器の技術を持っていなかったら、シンガポールを守れない…常に先進技術を取得せよと、私は、海軍の軍人に言っている」と述べている。[27]

中国を引き合いに出してはいるものの、要するに貿易立国である自国の周辺海域の、シーレーン（海上交通路）の安全保障のための情報収集に潜水艦が必要だ、という訳である。[28]この安全が保障されるべきシーレーンを含む海域（図1参照）には、公海はもちろん、インドネシア、マレーシアの主張している領海や排他的経済水域も、当然含まれているはずである。東南アジア地域外の大国の中国、そして近隣に位置し、自国よりは、はるかに大きなインドネシア・マレーシアと、シンガポールの脅威対象が多元重層的であるこ

表４　シンガポールの対外軍事協力の発展

年	内　　容
1967	イスラエルの軍事顧問招聘（1974年まで）
1970	初の英豪NZ馬星陸軍合同演習（Ex Bersatu Padu ）
1971.4	英連邦５ヵ国防衛協定（FPDA）締結
1974	シンガポール・インドネシア海軍合同演習（Ex Eagle）開始
1974	星馬米豪英加合同陸軍演習（Kangaroo）開始
1975	この頃、シンガポール国防軍の台湾での軍事訓練開始
1979	シンガポール・ブルネイ合同海軍演習（Pelican）開始
1980	シンガポール・インドネシア合同空軍演習（Ex Elang Indopura）開始
1981	FPDA ５ヵ国合同海軍演習（Starfish）開始
1981	星米合同陸軍演習（Ex Tiger Balm）開始
1983	シンガポール・タイ合同海軍演習（Singsiam）開始
1983.8	シンガポール・タイ合同空軍演習（Air Thai-Sing）開始
1984	シンガポール・マレーシア合同海軍演習（Ex Malapura）開始
1985	シンガポール・ブルネイ合同陸軍演習（Flaming Arrow）開始
1986	A-4 Skyhawk に U.S. F-18 H のエンジンを搭載、Super Skyhawk に改良
1988	FPDA 統合防空システム演習（Lima Bersatu）開始、独との提携でミサイル・コルベット艦建造
1989	スマトラの Pekan Baru に、シンガポール・インドネシア共同空軍射爆演習場（Siabu Air Weapons Range）設立
1989	シンガポール・マレーシア合同陸軍演習（Semangat Bersatu）開始
1989	シンガポール・インドネシア合同陸軍演習（Safkar Indopura）開始
1990.2	F-16 戦闘機導入、米アリゾナ州で乗員訓練
1990	星米豪合同空軍演習（Pitch Black）開始
1990	星豪合同海軍演習（Passex 等）開始
1990.11	星米軍事施設提供拡充協定
1992	シンガポール・マレーシア合同空軍演習（コード・ネーム不詳）実施
1992	シンガポール・ブルネイ合同陸軍演習（Ex Bold Sabre）開始
1993	シンガポール・インド合同海軍演習（コード・ネーム不詳）開始
1993	星馬泰印尼豪NZ合同海軍演習（Kakadu）開始
1993	シンガポール・フィリピン合同陸軍演習（Ex Anoa-Singa）開始
1994	星米泰合同空軍演習（Cope Tiger）開始
1994	シンガポール・ブルネイ合同空軍演習（Airguard）開始
1995	星台合同海軍演習（コード・ネーム不詳）実施
1996	シンガポール・フィリピン合同海軍演習（Ex Dagat Singh）開始
1996	星豪 Oakey 軍事協定で、星空軍ヘリ部隊が豪で軍事訓練へ
1997	星NZ合同図上演習（Silver Cobra）実施
1997	星英合同３軍演習（Lion City: 英国は海兵隊）実施
1997	星米合同海軍演習（Ex Carat）開始
1997	星伊合同海軍演習（コード・ネーム不詳）実施
1997	シンガポール・タイ合同陸軍演習（Kocha Singa）開始
1997.11	星・南アフリカ軍事協力協定締結（1998.10 に第２次協定）
1998.5	スウェーデン製中古潜水艦購入、同国で海軍乗員の訓練開始
1998.10	星仏防衛協力協定、仏で空軍訓練へ
1999.8	シンガポール・インドネシア空軍偵察演習（Ex Camar Indopura）開始
1999.11	星NZ合同海軍演習（Lion Zeal）開始
2000.3	Changi 海軍基地開設、米空母 Kitty Hawk 入港
2000.5	米泰３軍統合演習（Cobra Gold）にシンガポール国防軍29名正式参加
2000.10	星日米韓合同海軍潜水艦救難演習（Pacific Reach）開始

出典：*Pioneer* 各号, Ang Hwee Suan edit., *Dialogues with S. Rajaratnam*, Shin Min Daily News (S) Ltd, 1991, p.100, Andrew T. H. Tan, Singapore's Defence: Capabilities, Trends, and Implications, *Contemporary Southeast Asia*, Vol.21, No. 3, 1999, pp.451-474, *International Herald Tribune* (Nov. 14, 1990), 佐藤考一「ASEAN 諸国の合同軍事演習」『東亜』2000年10月号、50-71頁、『朝日新聞』2000年5月10日。

備考：国名略称は次の通り。星＝シンガポール、馬＝マレーシア、NZ＝ニュージーランド、泰＝タイ、印尼＝インドネシア。また、合同軍事演習で、開始年不明のものは実施と表記した。

とが、よくわかる。

（3）対外軍事協力の発展

最後に、対外軍事協力の発展であるが、表4に示したように、1967年のイスラエルの軍事顧問の招聘以来、シンガポールは、2国間あるいは多国間で、夥しい数の軍事協力協定や合同軍事演習を行ってきた。それらの内容は、大雑把にいって、2つに分かれる。第1は、直接シンガポールの国防能力の向上に役に立つもので、第2は、シンガポールと、協定ないし合同軍事演習の相手国の間の信頼醸成に資するものである。

第1の範疇に属するものは、さらに2つに分かれる。それは、兵器や技術の移転を含め、域外の大国がシンガポールの安全保障に関与するものと、SAF自身の軍事訓練の場を確保するためのものである。前者は、例えば英連邦5ヵ国防衛協定（FPDA）やその構成国の英国、オーストラリア、ニュージーランド、また米国やイタリア等、その他の先進諸国との合同軍事演習である（なお、米国、オーストラリアはSAFの訓練のための施設も貸与している）。[29]

後者は、ブルネイ、タイ、インド、フィリピン、インドネシア、南アフリカ、バングラデシュ、スウェーデン、フランス、台湾等での、合同軍事演習ないしは、SAFの演習・訓練である。図2に1987年から97年までの、確認できたASEAN域内の2国間合同軍事演習の実施状況を示したが、シンガポールとブルネイの合同軍事演習は17回と多い。

これは、両国が国境を接し、領土・領海問題も抱えているマレーシアを、共に潜在的脅威対象と見ていることと、国土の狭いシンガポールが、軍事演習用地を外に求めていること、そしてブルネイがSAFの先進軍事技術の移転を望んでいるためであろう。また、インドは、海軍が潜水艦を出して、インド洋でシンガポール海軍と対潜水艦戦のための演習をさせている。[30] さらに、台湾でのSAFの軍事訓練については、中国がこれをやめさせようと、自国での訓練をシンガポール側に持ち掛けているといわれる。[31]

第2の範疇に属するものは、言うまでもなく、シンガポールが潜在的脅威対象と見なしていると考えられるマレーシア、及びインドネシアとの間の、2国間合同軍事演習である。[32]既述の図2から明らかなように、シンガポールとインドネシアの間の2国間合同軍事演習は19回で、ASEAN域内の2国間合同軍事演習の中で最も多い。

一方、シンガポールとマレーシアの間の、2国間合同軍事演習は11回であるが、両国は他にFPDAの多国間合同軍事演習にも参加しており、同じ時期

にこちらは34回も実施されているので、これらを合計するなら、ASEAN域内の２国が参加した演習としては、最多になる。[33] 以上の経緯からは、シンガポールが、インドネシア・マレーシアへの脅威認識を強く持ち、域外大国の米国や英国、オーストラリア等への依存を強めながら、両国との関係改善も模索している状況が明らかであろう。

4. 結語

本稿では、総合防衛とSAFの歴史と装備、対外軍事協力の発展を分析してきた。これらの内容から見て、冒頭に挙げた３人の政治家の発言に表れた、３種の小動物、即ち毒エビ、マメジカ、ヤマアラシの防衛機能の譬えは、どれが一番妥当なのだろうか。

これらの比喩はいずれも、国防政策上の心構えを説明するものとしては、どれも外れているとはいえないと思われる。66年当時のリー首相の毒エビの譬えなどは、65年に武力制圧を逃れて、マレーシアから分離独立した経緯を考えると、マレーシアという小魚が、将来シンガポールという小エビを再び飲み込むことを仮定した発言ともとれる。

飲み込まれた（併合された）場合、シンガポールはマレーシア政府にとって御しやすい相手にはならないぞという決意を内外に示したと考えればわかりやすい。だが、これは現在の国防政策上の施策を意味するものとはいえないだろう。[34]毒を持つエビという防衛機能は、現実の装備や作戦等の面からは考えにくい。

では、マメジカはどうか。敵から「すばしこく逃げる」には、いちはやく敵の位置を知るための眼が必要である。シンガポールが、1987年に導入したＥ２Ｃ早期警戒機（E2C Hawkeye）等は、確かにこれに当たるといえるかもしれない。だが、ラウ議員（当時）のいう「逃げる」という表現には引っ掛かるものがある。淡路島程の小さな国土に住んでいるシンガポール国民には、逃げ場所はないからである。

こう考えると、すばしこく逃げるマメジカを引合いに出したのは、国防政策の実際上の類推からではなく、シンガポールが他国に対して積極的な攻撃の意図を持たない存在であることを、強調したかったためであると思われる（だが、インドネシアの寓話を見ると、マメジカという動物は、攻撃的ではないものの、ずるく知略に富んだ存在としても描かれているので、２つの範疇に分けられるシンガポールの対外軍事協力の発展や、本稿では扱わなかった

同国の全方位の外交政策は、部分的には、このマメジカの知略に譬えることができるかもしれない)。[35]

さて、最後に残ったのはヤマアラシである。実は、シンガポールの国防政策をヤマアラシに譬えた例は、筆者の知る限りでは前述のゴー・チョクトン発言のみである。国防政策の譬えとしては、大抵は毒エビかマメジカが引合いに出されており、ヤマアラシの譬えは、あまり有名ではない。だが、ヤマアラシの防衛機能を見てみると、現実のシンガポールの国防政策の態様、特に装備面と驚くほど類似点が多いことがわかる。

ヤマアラシの防衛機能は、肉食獣が捕まえようとすると背中の針を逆立てて抵抗するというものである。針が刺さった肉食獣は、ヤマアラシを捕らえるのを諦めて退散するし、それを記憶してヤマアラシを襲わなくなる。肝心なのは針の持つ、この抑止力のお陰で、ヤマアラシが敵の体への攻撃を防いでいる点である。

既述の総合防衛やSAFの装備を見ていくと、この針に当たると考えられるものは沢山ある。総合防衛の中の軍事防衛における、国内で戦うことを前提としない前方防衛戦略の考え方は、まさにそうだし、そのための装備としての戦闘機と戦車、各種ミサイル、潜水艦は、当然ヤマアラシの針に当たる。また、リー・ライト教授の「我々は先進兵器の技術を持っていなかったら、シンガポールを守れない…常に先進技術を取得せよと、私は、海軍の軍人に言っている」という発言も、常に新しい針を探求する姿勢の表れである。

結論としては、現在のシンガポールの国防政策は、小動物の防衛機能に譬えるなら、ヤマアラシのそれに最も近いということになろう。小さなヤマアラシ（シンガポール）は、大型肉食獣（インドネシア・マレーシアという潜在的脅威）に捕食されないために、全知全能をふり絞り（総合防衛)、より新しく、より防衛力の強い針（装備と域外大国との軍事協力）を求めると同時に、襲われないために、これらの大型肉食獣との信頼醸成の道も模索しているのである。[36]

注

1）黄彬華・呉俊剛編『シンガポールの政治哲学――リー・クアンユー首相演説集』田中恭子訳（勁草書房、1988年）、158-159 頁。

2）ラウ・テクスン博士からの1990年12月16日の筆者のヒアリング、及び *Far Eastern Economic Review* (Nov. 15, 1990), p.34, による。因みに国防政策をマメジカに譬えたのは、彼のオリジナルではないと思われる。マメジカについては、M.W.F.Tweedie, *Mammals of Malaysia,* Longman Malaysia, 1978, p.60, によれば、体長40～48cm、体重2kg以下と記されている。数種あり、近縁種はアフリカのコンゴにもいる。

3）Alan Chong, *Goh Chok Tong: Singapore's New Premier,* Pelanduk Paperbacks, 1991,p.85, 岩崎育夫『リー・クアンユー――西洋とアジアのはざまで』（岩波書店、1996年）、82頁を参照。日本でも、1970年当時の中曽根防衛庁長官のように、その防衛政策をハリネズミやウサギの耳に譬えた例がある。中曽根長官の発言について、防衛学会編『国防用語辞典』（朝雲新聞社、1980年）、285頁。

4）先行研究で、Total Defence を全面防衛と訳した例があるが、これは華字紙の表現をそのまま用いたもので、こなれた訳とは言えない。因みに、シンガポール国防軍の広報誌 Pioneer の華語版『国鋒報』の正式の表現は、全民防衛である。日本語訳では、総合防衛が定訳である。『国鋒報』1990年７月号、20頁、在シンガポール日本国大使館・在ブルネイ日本国大使館編 『世界各国便覧叢書　シンガポール共和国　ブルネイ・ダルサラーム国』（日本国際問題研究所、1987年）、24頁。

5）Andrew T. H. Tan, Singapore's Defence: Capabilities, Trends, and Implications, *Contemporary Southeast Asia*, Vol. 21, No. 3, December 1999, p.452.

6）シンガポール国防軍機関誌:*Pioneer* (Jul. 1990), p.20, Ministry of Defence (Singapore), *Defending Singapore in the 21st Century,* Grace Communications Pte Ltd, p.12.

7）国益とは、社会科学上の厳密な定義の出来るものではない。だが、ゴー・チョクトン首相はかつて国防相時代に、「我々の死活的利益」という表現で、主権、国土の保全、食糧の供給、経済的生命線（生計の手段）を挙げたことがある。Goh Chok Tong, Protecting Our Vital Interests, *People's Action Party* 1954-1984, People's Action Party, 1984, p.98.

8）Public Affairs Department, *Defence of Singapore* 1990, Ministry of Defence, pp.17-23.

9）原文は multi-racial であったが、シンガポールの政府刊行物は、90年代以降 race という言葉に代えて、ethnic group を使う例が増えているので、訳語をマルチ・エスニックで統一した。Public Affairs Department, *Defence of Singapore* 1990, op. cit., p.19. *Singapore* 1992, Ministry of Information and the Arts, 1992, p.230.

10）Andrew T. H. Tan, Singapore's Defence: Capabilities, Trends, and Implications, *Contemporary Southeast Asia*, Vol. 21, No. 3, December 1999, p.464. なお、緊急用滑走路として指定されている道路は、Lim Chu Kang Road の一部である。*Straits Times* (Dec. 8, 1997).

11）在シンガポール日本国大使館・在ブルネイ日本国大使館編『世界各国便覧叢書シンガポール共和国　ブルネイ・ダルサラーム国』前掲、29頁。Andrew T. H. Tan, Singapore's Defence: Capabilities, Trends, and Implications, op. cit., p.456.

12）筆者は地域安全保障環境を、（a）当該国家もしくは組織が所属する地域全体を構成する国民国家群の性格（国民統合の度合いと産業構造のあり方）、（b）脅威対象の数、（c）軍事次元の装置の性格、（d）地域全体の地形とも関連する地域紛争の

性格、の４つの要素に整理している。佐藤考一「ASEAN 地域フォーラム（ARF）—アジア太平洋地域における安全保障協力の試み—」山本武彦他編『冷戦後のアジアの安全保障』（財団法人日本学術協力財団、1997年）、184頁。

13) 1999年時点でのシンガポールのエスニック・グループ別人口比は、華人76.9%、マレー人14%、インド人7.7%、その他1.4%となっている。*Singapore* 2000, Ministry of Information and the Arts, 2000, p.41.

14) シンガポールの国内総生産に占める割合が最も多いのは、金融・サービス業の60.8%（除銀行サービス税）で、次が製造業の34.9%で、これらを合わせると国内総生産の95.7%になる。*Singapore* 2000, op. cit., p.119.

15) シンガポールにとって、インドネシア・マレーシアが潜在的脅威であり続けてきたことは公然の秘密だったが、これをはっきり記述した以下のような文献は極めて珍しい。Andrew T. H. Tan, Singapore's Defence: Capabilities, Trends, and Implications, op. cit., pp.451-474. また、インドネシア・マレーシアを潜在的脅威と見なしてきたことを裏付ける話として、インドネシア・マレーシアに親族がいることの多い、自国内のマレー人をシンガポール国防軍は幹部に登用することを避けてきた経緯がある。*Straits Times* (Feb. 28 & Mar. 27, 1987). マレーシアへの水の依存について、シンガポールは1996年時点で、115万立方メートルの水を１日に使用していたが、マレーシアからの購入水量は、その15.6%に当たる約17.9万立方メートルである。これで見ると使用水量の84.4%は国内で賄えているようにみえるが、それは天水を利用した貯水池によるものである。これは降雨量に左右される上、工業化と高層住宅の拡張で使用水量は増える一方である。そこで、1991年にインドネシアのリアウ州との間で、１日450万立方メートルの水の購入協定を結んだ。2005年完成予定の海底パイプラインで給水される予定である。*Singapore* 1997, Ministry of Information and the Arts, 1997, p.190, *Sunday Times* (July 2, 2000). 因みに少し古い資料を見てみると、1988年の時点でのシンガポールの水の消費量は１日当たり801.7 million litres、マレーシアのジョホール州からの取水量は１日当たり506 million litres であったので、水の自給率は46.9%となり、実情はより深刻である。現在でも実態はこちらに近いという説（『朝日新聞』2002年２月５日）もある。*Straits Times*(July 25,1990), *Singapore 1989*, Ministry of Communication and Information, 1989, p170,『アジア動向年報』1989年版、アジア経済研究所、1989年、427-428頁より筆者算出。また、シンガポールは現在、農業生産は殆ど行っておらず、食糧は輸入に頼っているため、経済統計には農産物が見当たらない。*Singapore* 2000, Ministry of Information and the Arts, 2000, pp.114-119.

16) 戦略的深度（Strategic Depth）について、Andrew T. H. Tan, Singapore's Defence: Capabilities, Trends, and Implications, op. cit., p.456.

17) 以下、特に注記のない限り、歴史については、SAF Silver Jubilee Supplement, *Pioneer* (July 1990), pp.2-31, による。

18) この点については、佐藤考一「書評　岩崎育夫著『リー・クアンユー——西洋とアジアのはざまで』」『アジア研究』（第42巻４号、1996年）、105-115頁を参照。以下のラジャラトナムからのヒアリングも同様。イスラエルへの軍事訓練委嘱について、Andrew T. H. Tan, Singapore's Defence: Capabilities, Trends, and Implications, op. cit., p.454, Lee Khoon Choy, *On the Beat to the Hustings*, Times, 1988, p.87.

19) S・ラジャラトナム元外相からの、1989年７月17日の、筆者のヒアリングによる。なお、このヒアリングの要旨は、佐藤考一『平成元年度外務省委託研究報告書　リー・クアンユー政権の軌跡—シンガポールの対外政策—』平成２(1990)年３月、

日本国際問題研究所、50－58頁に収められている。

20) 一部の兵士は訓練のため、イスラエルへ送られた。Mickey Chiang, *Fighting Fit: The Singapore Armed Forces*, Times Editions, 1990, p.41, Andrew T. H. Tan, Singapore's Defence: Capabilities, Trends, and Implications, op. cit., pp.454–457. ガブリエル・ミサイルの採用について、*Pioneer* (Nov. 1998), p.8.

21) 主力戦車、軽戦車、主要水上戦闘艦の目安を挙げておく。主力戦車は装甲が厚く、装備重量が重いもの（SAF が採用している Centurion で51.8トン程）、軽戦車は装甲が薄く、装備重量が軽いもの（AMX －13で15トン程）、主要水上戦闘艦は、外洋行動が可能な排水量1000トン以上の駆逐艦もしくはフリゲート艦と呼ばれている船のことである。なお、シンガポール海軍は大型艦艇を全く持っていないわけではない。5隻所有していると言われる Endurance 級戦車揚陸艦（米国製 LST–511級をシンガポールで建造したもの）は、排水量6000トン、兵員200名、戦車16輌を積載可能である。シンガポールは、これらの揚陸艦を、SAF の海外での軍事訓練のための輸送に用いている。同様の戦車揚陸艦について、周辺諸国ではインドネシアが16隻、マレーシアが2隻、タイが6隻、フィリピンが7隻程度、所有していると言われる。*Pioneer* (May 1999), pp. 2–7, 英国国際戦略研究所『ミリタリーバランス　1992－1993』（メイナード出版、1993年）、280頁。なお、上記の戦車の個別のデータについては、『防衛年鑑 '92』（防衛年鑑刊行会、1992年）、及び防衛庁関係者からの筆者の2001年12月19日のヒアリングによる。

22) シンガポールの破壊に対する弱さは、太平洋戦争中の、日本軍と英軍の戦闘を考えればよくわかる。シンガポール攻略戦は、1942年2月8日のジョホール河畔からの砲撃に始まり、僅か1週間後の2月15日に終了している。辻政信『シンガポール—運命の転機—』（東西南北社、1952年）、272頁。

23) チュー司令官、SAF 関係者と面談した、新宮領篁防衛駐在官（在シンガポール日本国大使館）からの筆者の、1989年12月18日、及び1990年5月8日のヒアリングによる。なお、近年のブルネイでの演習は、通常のジャングルでの陸軍部隊同士の戦闘だけでなく、ジャングルに潜む陸軍部隊が、上空に飛来した空軍の戦闘機や攻撃ヘリを、地対空ミサイルで撃ち落とす想定で行われている。*Straits Times* (Nov. 27, 1997), *Straits Times* (Dec. 12, 1997).

24) ラウ博士（前出）からの、筆者の1994年11月14日の、東京におけるヒアリングによる。

25) Tim Huxley 氏の談話。Andrew T. H. Tan, Singapore's Defence: Capabilities, Trends, and Implications, op. cit., p.455.

26) International Institute for Strategic Studies (IISS), *Military Balance* 1999—2000, IISS, 2000, pp.189–198.

27) リー・ライト教授からの、筆者の2000年3月27日のヒアリングによる。（　）内は筆者の補足である。

28) SAF が、シーレーン防衛を重視している点について、*Pioneer* 誌は、しばしば特集を組んでいる。例えば、*Pioneer* (May 1991), pp.9–17, *Pioneer* (May 1998), pp.2–11, *Pioneer* (Jul. 2000), pp.4–5. 潜水艦による情報収集の有用性について、江畑謙介『日本の軍事システム』講談社現代新書、2001年、106–108頁。

29) FPDA の演習は、少なくともインドネシア側からは、英連邦5ヵ国がインドネシアを潜在的脅威と想定して行っているものと受け止められている。以下における、モフタル元インドネシア外相の発言を参照。*Straits Times* (Sept. 27, 1990). また、この多国間合同軍事演習は、シンガポールにとっては、マレーシアとの関係が悪化して

いる時でも実施されていることから、両軍の間の最低限の信頼醸成にも役立つ、二重の意味で重要な合同軍事演習である。なお、シンガポールは、1990年11月には、米軍への軍事施設提供拡充の協定を結び、2001年に開設したチャンギ海軍基地に米空母の入港も認める等、米軍との結び付きも強めている。*International Herald Tribune* (Nov. 14, 1990), *Pioneer* (May 2001), p.10.

30) SAF の軍事訓練のための施設を提供している国は、米国（4ヵ所）、フランス、南アフリカ、バングラデシュ、タイ、インドネシア（空軍射爆演習場を共同設置、これ自体にも信頼醸成の意味がある）、ブルネイ、オーストラリア（3ヵ所）、ニュージーランドの9ヵ国である（台湾を除く）。*Pioneer* (June 1999), pp.2–3. インドとの合同海軍演習について、*Pioneer* (Apr. 1999), p.14.

31) *Jane's Defence Weekly* (Jan. 10, 2001), P.16. なお、阿部純一＝霞山会主任研究員の御教示によれば、中国側が台湾の代替訓練のために提示した候補地は、海南島であるとのことである。

32) 筆者の質問に対して、あるシンガポール国防省の関係者は、インドネシアとの合同軍事演習は、「両国の信頼醸成が主で、仮想敵は考えられない」と言い切った。また、マレーシア陸軍のある将校は、シンガポールとマレーシアの合同軍事演習に際し、「すでに良好な両国陸軍の関係を改善することを希望している」と含みのある発言をしている。シンガポール国防省関係者からの筆者の1999年3月23日のヒアリング、及び *Pioneer* (Dec. 1989), pp.2–10, による。

33) 演習回数については、1987年から97年までの、*Pioneer* 及び『東南アジア月報』各号から筆者集計。なお、ASEAN 諸国の合同軍事演習全体については、佐藤考一「ASEAN 諸国の合同軍事演習」『東亜』2000年10月号、50-71頁を参照。

34) Andrew Tan は、シンガポールの毒エビ戦略は1974年までで終わり、ベトナムが統一された75年から軍備拡張を中心とする新段階へ入り、85年以降は先進兵器が導入される段階に入り、さらに95年以降は情報技術中心の軍事革命の段階に入ったとしている。Andrew T. H. Tan, Singapore's Defence: Capabilities, Trends, and Implications, op. cit., pp.457–465.

35) マメジカの寓話について、Margaret Muth Alibasah, *Indonesian Mouse Deer Fables*, Penerbit Djambatan, 1986がある。なお、マメジカの英語表現は mouse deer、マレー語表現は pelanduk（マレーシア）、もしくは kancil（インドネシア）である。

36) 襲われないための政策としては、国防能力を高めたり、合同軍事演習で信頼醸成を行うほかに、経済協力をして、シンガポールの存在の維持が両国にとって、プラスであると理解させることがある。これについてシンガポールは、1989年以降、インドネシア、マレーシアとの投資協力で、「成長のトライアングル」の形成を目指している。*Straits Times* (Dec. 21, 1989), 及び佐藤考一「ポスト・カンボジアのシンガポール」岡部達味編『ポスト・カンボジアの東南アジア』（日本国際問題研究所、1992年）、222－255頁。また、シンガポールが先進兵器を購入して、国防能力を高めると、インドネシア・マレーシアがこれに対抗して先進兵器を購入しようとする軍拡競争的な現象も起こっている。例えば、インドネシアとマレーシアは空中給油機を購入したし、マレーシアは潜水艦も購入を考慮中である。*Jane's Defence Weekly* (Jan. 22, 1997), p.12, *Straits Times* (Apr. 26, 2001).